

2008年6月11日

報道各位

三菱地所株式会社

三菱一号館美術館
「開館記念展」及び「ロゴマーク決定」
に関するお知らせ

2010年4月に開館する「三菱一号館美術館」の開館記念展として、「マネとモダン・パリ」展を開催することが決定しましたのでお知らせいたします。また、同美術館のロゴマークにつきましても策定しましたので、併せてお知らせいたします。

同美術館は、丸の内に初めて建設されたオフィスビル「三菱一号館」(1894年竣工)を復元した建物を利用して運営する施設ですが、開館記念展となる「マネとモダン・パリ」展は、旧「三菱一号館」との同時代性を踏まえ、19世紀に活躍したエドゥアール・マネを中心に、同時代の作家の関連作品、写真、建築模型など、およそ100点の作品で構成される予定です。

美術館のロゴマークは、アートディレクター・服部一成氏を起用、オリジナリティあふれ、斬新で、時代性を感じるデザインを目指しました。

三菱地所では、アクセス性に優れた立地を活かし、多くの方々が街の歴史や文化、芸術とふれあうことのできる丸の内の「文化芸術の中核施設」を目指して、「三菱一号館美術館」を運営してまいります。

以 上

2010年4月 三菱一号館美術館 開館記念

マネ と

モダン・パリ 展

〈開催趣旨〉

この度三菱一号館美術館におきましては、2010年4月の開館記念として「マネとモダン・パリ」展を開催する運びとなりました。

エドゥアール・マネ(1832～1883)は、「モデルニテ(現代性)」溢れるさまざまな作品を通して、その後の印象主義やポスト＝印象主義の画家たち、ひいては20世紀の美術家たちに極めて大きな影響を及ぼした、近代絵画史上最も重要な画家のひとりです。パリに生まれ、パリに生きたこの画家は、19世紀後半、ルイ・フィリップによる7月王政からナポレオン三世の第二帝政、パリ・コミューヌの騒乱を経て第三共和制におよぶ体制下でさまざまに変化する社会の目撃者でもありました。構造的にも文化・社会的にも夥しい変貌を遂げたこの「19世紀の首都パリ」に住む人々の生活と感受性の変化は、著しいものがあったのです。そしてその近代化と直に向き合い、さまざまな面を描いたのがマネでした。

2010年4月、新たに丸の内に誕生する三菱一号館美術館の開館記念「マネとモダン・パリ」展は、19世紀を代表する芸術家マネの全貌を捉えると同時に、近代都市と芸術家、そして都市と芸術の関係を再考しようとするものです。マネの芸術の外的・内的発展を、その実質的形成期であった1850～70年代の作品を中心に、パリ市街の具体的変化とからめて展覧します。新しい時代の人々の生活、そして内面の変化に対峙した「現代生活の画家」マネと同時代の芸術状況を新たな視点から解明しようという試みです。

本展は、オルセー美術館所蔵の代表的油彩作品ほか国内外の美術館に所蔵されるマネの油彩・素描・版画 70点あまりを中心に、同時代の作家の関連作品、写真、建築模型など、およそ100点の作品で構成される予定です。

〈主催〉 三菱一号館美術館 読売新聞東京本社 ほか

〈企画協力〉 オルセー美術館

〈展覧会コミッショナー〉

高橋明也(三菱一号館美術館館長)

カロリーヌ・マチュー(オルセー美術館主任研究員)

〈会期〉 2010年4月上旬～7月

〈会場〉 三菱一号館美術館(建設中)

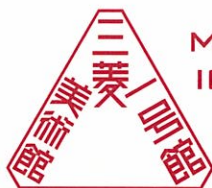
ロゴマーク

●基本形



MITSUBISHI
ICHIGOKAN
MUSEUM,
TOKYO

●バリエーション



MITSUBISHI
ICHIGOKAN
MUSEUM,
TOKYO



三菱一号館美術館
MITSUBISHI ICHIGOKAN MUSEUM, TOKYO

三菱一号館美術館
MITSUBISHI ICHIGOKAN MUSEUM, TOKYO

ロゴマークのデザインにあたって

服部一成

「三菱一号館美術館」という特徴ある名前には、「原点を顧みて三菱一号館を復元し、未来に向けて美術館を作る」という理念が凝縮されている。この名前そのものをシンボルにしようと考えた。「三菱」を中心軸にして「一号館」「美術館」を左右にシンメトリーに配置し、繰り返しの音のユニークさを視覚的にも強調した。「文化交流・発信の中核」という美術館のコンセプトを踏まえ、東西文化の交流をイメージして、和文名と英文名を常に組み合わせて使用するプランとした。文字のフォルムは直線で構成し、石に彫り込まれた文字のようなクラシックさと、モダンな造形感覚の両立を図り、三菱一号館が建った19世紀と現代との時代の交流をイメージした。赤いシンボルカラーは、建物の煉瓦の色であり、また、街の中心地であって多様な人々が行き交う新しいタイプの美術館の活力を象徴する色として選んだ。

服部一成 (はっとり・かずなり) / アートディレクター、グラフィックデザイナー。1964年東京生まれ。1988年東京芸術大学美術学部デザイン科卒業。ライトパブリシテイを経て2001年よりフリーランス。おもな仕事に、キューピー「キューピーハーフ」などの広告キャンペーン、雑誌「真夜中」、「here and there」、「流行通信」のアートディレクション、ユニクロ「HOTELS HOMES by UNIQLO」のブランド計画、東京国立近代美術館「わたしいまめまいしたわ・現代美術における自己と他者」展、横浜美術館「中平卓馬展」、川村記念美術館「ハンス・アルプ展」などのグラフィックデザイン、旺文社「プチ・ロワイヤル仏和辞典」などのブックデザイン。第6回亀倉雄策賞、原弘賞、ADC賞、ADC会員賞、東京TDC会員賞、東京TDCグランプリなどを受賞。

「三菱一号館」復元工事の進捗状況について

現在、「三菱一号館」建築現場では、中国・長興で焼き上げた約230万個の煉瓦を、日本全国から集まった100名あまりの煉瓦職人により一つひとつ積み上げる作業が行われ、7月中旬に完了する予定です。

【三菱一号館の復元について】

旧三菱一号館は、イギリス人建築家ジョサイア・コンドルの設計により、1894年（明治27年）に竣工（1968年（昭和43年）解体）した、イギリス・ヴィクトリア時代のクイーン・アン・スタイルの赤煉瓦建物です。三菱地所では、当時の設計図面や一部当初部材を保管しており、専門家の助言を受けながら、忠実な復元を目指しています。

煉瓦組積造は、明治期に多く採用された煉瓦で壁を構築する構造形式で、旧三菱一号館では耐震煉瓦造が考案され、要所に「帯鉄」（煉瓦の水平目地に挟まれた帯状の鉄板）を敷き込む工法が採用されました。復元に当たっては、免震装置の基礎の上に当時の工法に倣って煉瓦を積みます。煉瓦については当時の質感に出来る限り近づけるため、中国において約230万個を一つひとつ型枠で成型して焼いたものを使用しています。窓まわり等の装飾石については、当時と同じ安山岩のうち調達可能なものの中から意匠的に近似した江持石（福島県）を選びました。また、屋根のスレート葺きや銅版による板金、内装など伝統的な建築技術によって明治期の赤煉瓦造を蘇らせます。

【三菱一号館：計画概要】

延床面積：約6,000㎡（約1,800坪）

階数：地上3階、地下1階

構造：煉瓦組積造

工期：2007年2月5日～2009年4月（予定）

（現場写真）



レンガ積みの様子



耐震レンガ造の帯鉄



仕上げ前レンガ内壁→